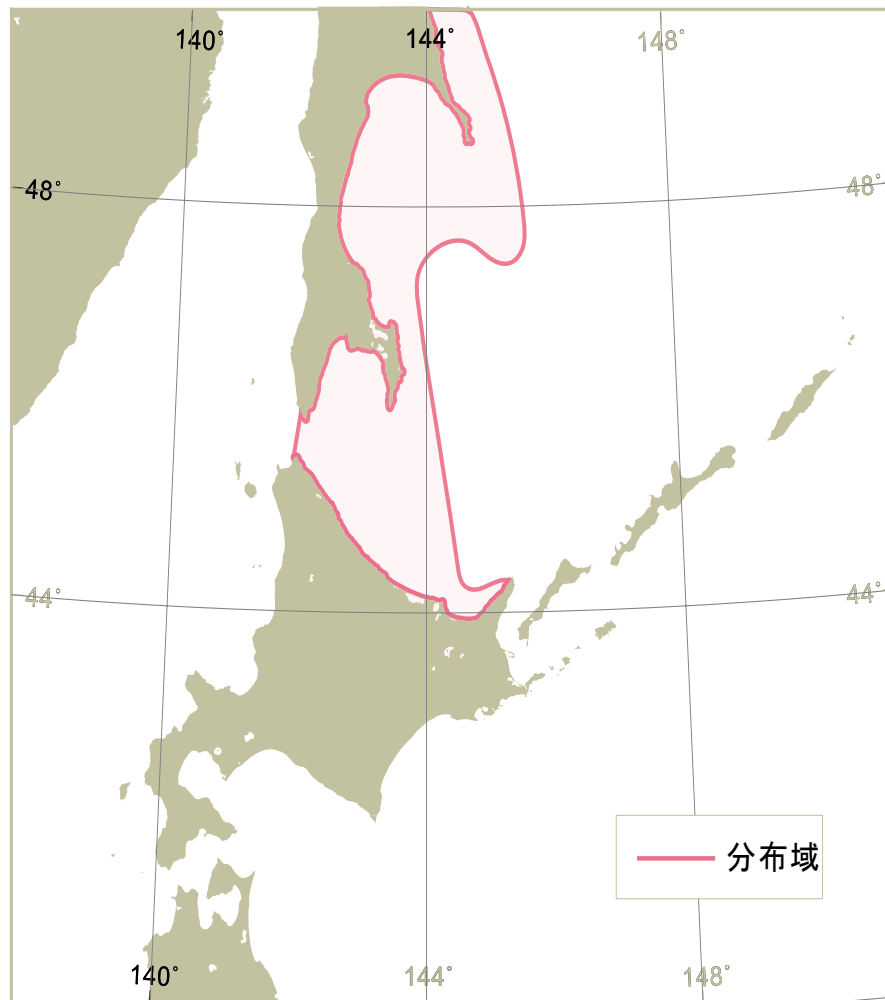


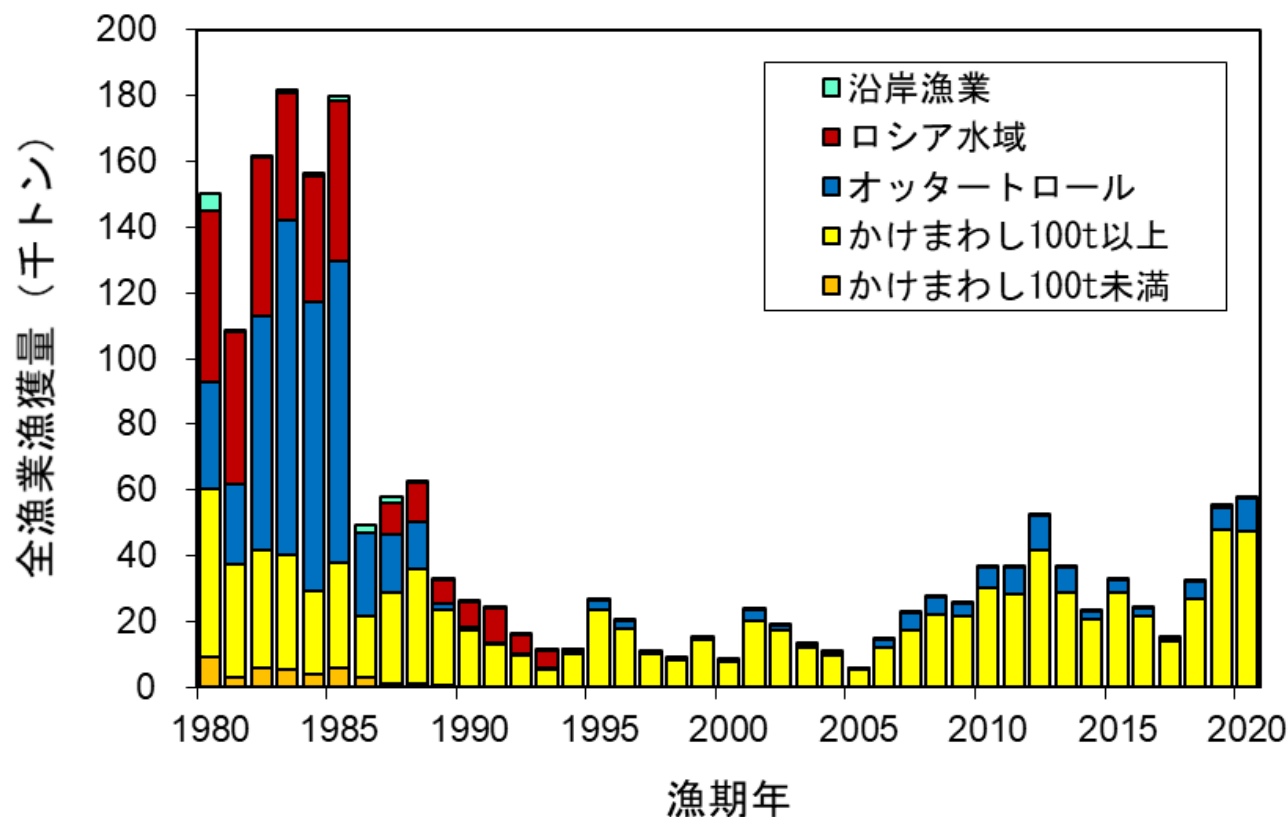


スケトウダラ オホーツク海南部 令和3年度資源評価結果



- ロシアとのまたがり資源
日本水域は分布の南端
- 現在は日本水域でほとんど再生産しておらず、他の海域で発生した集団からの一時的な来遊群が資源の主体
- 加入起源や系群構造など生態的に不明な点が多い
- 海洋環境や来遊状況により資源豊度は大きく変化する可能性が高く、推定困難

漁獲の動向



- 漁期年(4～3月)の漁獲量は、80年代前半まで15万トン前後で推移したが、ロシア規制強化等で86年漁期に大きく減少、90～2009年漁期は3万トン以下で推移
- 2006年漁期から増加したが、2013年漁期以降は減少
- 2018年漁期以降は増加し、2020年漁期の漁獲量：5.8万トン

資源評価の流れ

資源量指標値(かけまわしCPUE)、漁獲量



2020年漁期の資源量水準と過去5年(2016～2020年漁期)の平均漁獲量を算出

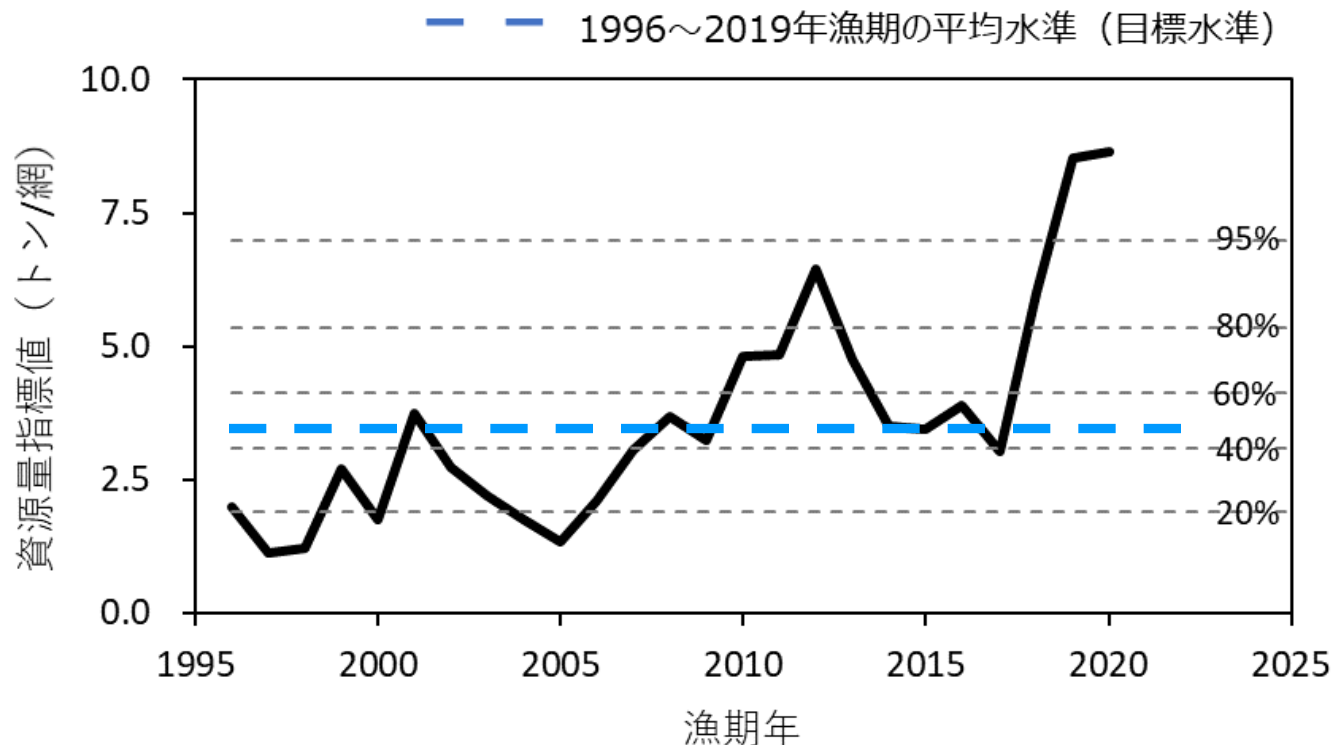


またがり資源としての特性を考慮すると「令和3(2021)年度 漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針」に基づく管理基準値の設定は妥当ではない



資源管理基本方針で定められた「維持または回復させるべき目標となる値」を基準に現状評価

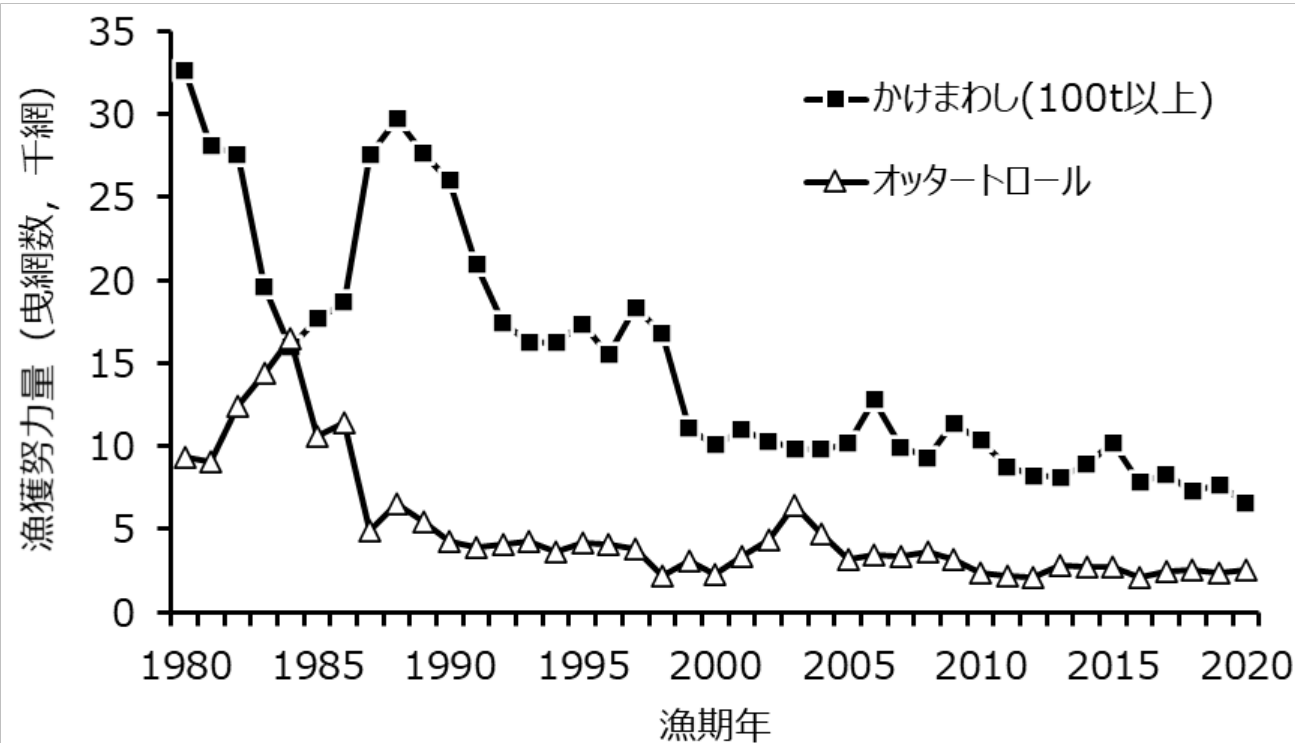
資源の動向（資源量指標値）



資源量指標値の推移と累積正規分布を適用したときの資源量水準
青破線は資源管理基本方針で定められた目標水準を示す。

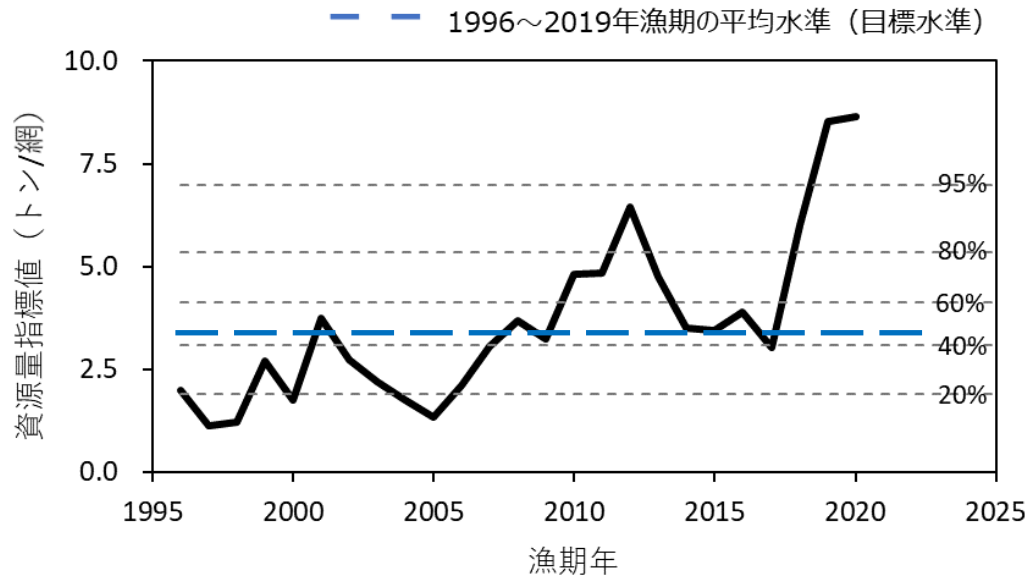
- 資源量指標値である「かけまわしのCPUE」は増加傾向、2020年漁期は1996年漁期以降では最大の8.7トン/網
- 2020年漁期の資源量指標値は、資源管理基本方針で定められた目標となる水準（3.41トン/網）を上回った

漁獲努力量



- 日本水域での漁獲の大半は沖合底びき網漁業による
- 減船の結果、許可隻数は1986年の80隻から2016年以降は14隻まで減少
- オッタートロール・かけまわし漁法のいずれにおいても、漁獲努力量は過去に比較して抑制されている

漁獲シナリオ



本資源の漁獲シナリオでは、資源量指標値の1996～2019年の平均水準（3.41トン/網）が、維持または回復させるべき目標として定められている。2020年の資源量指標値（8.7トン/網）は、平均水準を上回り、過去最高値である

資源量指標値と目標とされる水準

- 本資源の資源量指標値は日本水域における情報に限られ、「跨り資源」である本資源全体の動向を捉えることができないことから、最大持続生産量に関係する目標管理基準値や限界管理基準値を定めることは困難である
- 本資源の漁獲シナリオでは、我が国の漁船による漁獲の状況等を踏まえて、我が国漁船の操業水域に分布する資源の最適利用が図られるよう漁獲を管理